

MfG\_J\_Chozenkan\_and\_Nagaoka

T-10-6\_燕・長善館の出身人物と長岡

0. はじめに、並びに人物表

1. 豪商今井と西川・蒲原舟道、新潟蒲原往来

2. 長善館

3. 鈴木家の人々、長善館の出身人物 館主、鈴木虎雄

長谷川泰、竹山屯、大竹貫一

竹山屯・長谷川泰・池原康造の三人の関係、生歿年

・お互いに、親戚関係を結んでいた

その他の出身人物として、木曾恵禪、鷲尾 政直

高橋 竹之介、大河津分水建設に貢献した人々 ～T-12-2\_高橋 竹之介 (詳細別記)

高橋竹之介記念館

誠意塾主・高橋竹之介

三島億二郎追悼長句一編

4. 日本の中国学を作った人たち

5. 良寛と初代館主「鈴木文臺」 ～概要を0. 人物表、詳細は別ファイル 良寛

## 0. はじめに、並びに人物表

江戸時代、豪商・今井家、越後屈指の漢学塾・長善館とともに、長岡藩領にありました。

幕末、河井継之助は、横浜でガトリング二門を含む武器一式を一万両で購入しましたが、その即金決済を越後で請け負ったのが、この今井家でした。

良寛は、長善館初代館主「鈴木文臺」が幼少期のころ、論語を講義する文臺の才を見出し、気にかけるようになり、その後の交流につながります。

燕市はウェブページに良寛にふれる中で、その良寛の死の二年後、水禍と重税にあえぐ農民への思いを受けた文臺により開学された長善館が、代々革新的な教育を行ない社会に役立つ実践型の人物を育てたと言及しています。

最初に、豪商今井家と、それを支えた物流網を説明します。

江戸期後半の長岡藩のメインバンクとして、頻繁に藩財政を支援し、財政危機を経営指南により脱却せしめた豪商で、今井家の存在なくして幕末の長岡藩の武装中立政策、軍事大国化はありえなかつたといえます。

(ニッチな話として、燕出身の人物、世界の亀倉雄策さんの先祖も、江戸の中期、今井家とともに長岡藩を財政支援した有力庄屋のひとつでした。)

また今井家奉公人の人材育成に密接に関係したのが、長善館だと思います。

戊辰の役で、長善館の幕末入塾者の竹山屯、長谷川泰は、各々、一方は西園寺公望の侍医として、また他方は長岡藩軍医として従軍し、特に長谷川泰は、只見で河井継之助の最期を看取っています。

木曾恵禪は、長岡の長永寺に養子として入り、私塾「囂外齋(こうがいこう)」を開設し、江戸末期の長岡の教育に尽力しています。

高橋 竹之介は、戊辰の役の新政府側の越後戦線参謀、誠意塾塾頭として深い縁を有し、お墓は、長岡千手の寺院、眞照寺にあり、墓石の後ろの碑文は、誠意塾の門人であった武石貞松謹撰の文字であります。

このように、今井家、及び長善館は、幕末・明治期の長岡に大きな縁を持つており、長岡ガイドに極めて有用と思っておりまして、トピックスのひとつとしてまとめました。

吉田・栗生津にあった長善館の名は、礼記の「善を長じて失を補う」からとったとされる。

館主の系譜と鈴木虎雄

鈴木文臺(1796年-1870年) 初代館主。 良寛没の二年後の1833年に長善館を開学。 良寛は、18歳の文臺に初見で才能を認め、江戸に勉学を進めた。 後も20年間、親交。 鈴木愬軒(てきけん1836年-1896年) 二代館主。 小千谷片貝の小川家に生まれ、 文臺に師事し、師の二女と結婚、長善館を継ぐ。 子息に柿園・彦嶽・豹軒。 柿園(しえん 1861年-1887年) 教師。 彦嶽(げんがく 1868年-1919年) 三代館主。 彦嶽は、1889(明治22)年、東京専門学校英語科を修了(校長は二代目の前島密) 鈴木虎雄(豹軒、1878年-1963年) 1961年、川端康成氏らとともに、文化勲章。 豹軒の漢詩のなかに、「朝暮東西看れども厭わず 蘇門の嶽雪剣峯の青」の句 京都学派の中国学の祖。 弟子に小川環樹氏、吉川幸次郎氏ら。 長善館では森鷗外の漢詩の師と云われる師範代、桂湖村に学ぶ。

(長岡関連話題\_1) 良寛さん

高僧であり、漢詩・和歌、書にも卓越しながら、無欲恬淡に民と共に生きたマルチ人間。 当時、曹洞宗門で最も厳しい修行道場で印可を受け、処遇されもした、類まれな高僧。 然るに生涯寺に属さず弟子も持たず、貧窮に苦しむ民衆に寄り添った孤僧。多くの書、詩。 相馬御風の著作、「大愚良寛」

安田鞆彦設計の、生家跡の「良寛堂」(日本美術院の画家で、良寛研究家)

(長岡関連話題\_2) 幕末前後100年の戊辰、ほかの出来事

幕末の数十年間、吉田・大庄屋の今井家、亀倉家らが、度々長岡藩の財政破綻を支えた。 戊辰の役では、敵味方に分かれて戦う塾生もあった。 通算で33期、76年) 維新後は明治末まで公教育と併立。 塾生が県の内外で活躍した。(例: 国会議員 7名、

(長岡関連話題\_3) 高橋竹之介と誠意塾

勤皇主義者、隠密の任命書、西軍兵士に配付された越後地図。 東京遷都反対の罪で約十年の収監、その後の誠意塾の創設の想い。 塾生の堀口久萬一・武石貞松の終生の友情と、子息・弟の大學生・弘三郎へ相互に支援。 三島億二郎一周忌に寄せて、戊辰の健闘と維新後の業績を讃える長文の追悼文。 大河津分水の建設開始に奔走。

(長岡関連話題\_4) 医学・中国学・文学、教育、政治、郷土貢献など

医学の竹山屯、長谷川泰、中国学の鈴木虎雄、文学の堀口久萬一、武石貞松、ほか 様々な分野で活躍することになる人材を育て、更に彼らが、それぞれの道で教育に貢献し、 その後継者が、また活躍するという、教育の連鎖。(これも「米百俵」に比するもの) 北越戊辰戦争伝承館前の長谷川泰像の見つめる先は、長善館か。

(長岡関連話題\_5) 大河津分水建設 大竹貫一、他に戊辰役参戦者

高橋竹之介が、大竹貫一とともに、大河津分水建設につき、再三、当時の政府要人で あった西園寺公望、山縣有朋らに働きかけ、建設し建設実現に尽力した。 明治天皇より下賜の褒美の品は、今も中之島・杉の森の「高橋竹之介記念館」に、陳列。

(話題_1)	良寛さん
・良寛さんが鈴木文臺を見出し、勉学の道を歩ませたと云える。	
1804年頃	良寛56歳、文臺18歳の頃、文臺は良寛に「この子将来見るべきものあるべし」と才能を認められ、その後も親交を続けた。
1826年	良寛、乙子神社草庵から島崎・木村家草庵へ移る。
1833年	文臺、栗生津村私塾を創設。
1912年に閉鎖されるまでの約80年間、1,000人を超える塾生。	
・度重なる洪水に続く、三条地震	つらい農村の人々に寄り添う。寛政甲子夏。
・相馬御風	大愚良寛の執筆
高田の東北日報新聞の俳句撰者、同時期に武石貞松が漢詩撰者早稻田の同期に会津八一	
・安田鞆彦	良寛堂の設計、良寛研究家としても知られる～日本美術院岡倉天心 別荘「赤倉山荘」
(話題_2)	幕末前後100年と蒲原
・多くの塾生が、長岡、そして日本の幕末から揭示維新後の歴史に関与	
・吉田の大庄屋の今井家、亀倉家が、老中就任と洪水頻発で疲弊した長岡の藩財政を支え、河井の幕末版改革につながる。	
・戊辰では塾の修了生が敵味方に分かれる	
長岡藩にあっても河井の方針に従わず新政府軍に与した勤皇主義者が、存在しその間に長善館出身者が多くいた	
当時の館主の惕軒自身も関与していた。戊辰戦争が始まると、高橋らは長岡藩の情勢を新政府軍に報告、小千谷談判決裂の一因となったとも言われている。文臺は彼らの活動を良しとして いなかつたらしく、	
文臺と惕軒の間に確執があったと言われている。(惕軒の日記より)	
(話題_3)	高橋竹之介と誠意塾 (1901年まで20年間で600人の塾生)
・三島億二郎一周忌に寄せて長文の追悼文	
戊辰の健闘、戦後の産業、病院建設・北海道開拓等の業績をを讃えた。	
・堀口久萬一・武石貞松と堀口大學・武石弘三郎	
久萬一は、閔妃事件当時の仁川・外務省領事官補。日露戦争直前のアルセンチン戦艦獲得競争、1913年のメキシコクーデターで大統領の家族を助ける。武石貞松は、中之島の農業・教育の改革者。	
大學、弘三郎は、「友情の双情」とともに、久萬一・貞松の友情により育てられたといつても、過言ではない	
・大河津分水建設に努める、大竹貫一、高橋竹之介に、明治天皇より下賜	
の平櫛田中作・彫刻一体、大竹貫一は竹之介の力大なりとして、譲る。	

## (話題\_4) 医学・中国学・文学

新潟、そして日本医学会に、先駆者を輩出

竹山屯 藍沢南城にも学ぶ

西園寺公望の従軍医師

森鷗外、小金井良精(皿三郎のよい)

長谷川泰

長岡藩軍医

日本の医師養成学校

戊辰記念館前庭の銅像発起人に大村智博士の名

鈴木虎雄

新潟は鈴木虎雄、倉石武四郎、諸橋轍次ら、

中国文学、中国語学、漢字学の先駆者を輩出

## (話題\_5) 大河津分水建設 大竹貫一、他に戊辰役参戦者

大河津分水建設

大竹貫一、高橋竹之介ほか

老子に

「天の道は、余有るを損して不足を補う。

人の道は、則ち然らず、不足を損して以て余り有るに奉ず」

## 1. 豪商今井と舟道、河渡

今井家は、江戸時代、越後長岡藩を支えた豪商です。  
(現在は新潟県燕市ですが、当時は越後長岡藩領・巻組の中心地でした。)  
(「1880年代半ばにおける農村の私塾」(池田雅則)より)



今井家の蔵 (鎧絵は見えない)、  
この近くを西川が今も流れている。

以下は、新潟県燕吉田下町4-4 香林堂(今井家住宅)の記述を参考にしました。 <http://matinami.o.oo7.jp/kousinetu/tubame-yosida.html>

弥彦山の東麓に吉田町(燕市吉田)が位置する。西川の自然堤防上にできた町である。

西川舟運の河岸場で、長岡藩の郷蔵が置かれ、藩米の集積や木綿の集荷地として、また1・6の六斎市の立つ在郷町として栄え、藩政・経済の要地となり、また弥彦神社の参道にあたる茶屋町としても賑わった。

元和2年(1616)から長岡藩領で、安政5年(1858)の家数540とある。

### 下町にある豪商今井邸

今井家は近江出身で近江屋を名乗り、数百町歩の大地主にして実業家。幕末には長岡藩に藩士として取り立てられ藩の経営に携わった。さらに銀行や病院を独力で創設し吉田町の発展に寄与していた。

(現・吉田病院の始まりで、ちなみに次の当主も、現在はお医者さん。)  
近くにある吉田天満宮も今井家のもの。

吉田町は西川舟運(蒲原舟道)の河岸場で、長岡藩の郷蔵が置かれ、藩米の集積や木綿の集荷地として、物資が集散する市場町である一方、弥彦神社参道の茶屋町としても賑わった。さらに長岡藩の役所、郷蔵が置かれるなどこの地域における政治経済の中心地でもあった。

蒲原舟道の中心地曾根には長岡藩曾根代官所が置かれた。

長岡藩曾根組、巻組の管理 (新潟・西蒲区曾根750)  
～南は栗生津、北は新潟村、西は岩室、東は漆山、五ノ上までの  
近隣77か村の行政、司法、徴税を司る役所であった。

今井家は、御用商人として蓄財した財力で周辺の農地を買い上げていった。寛政4(1792)年には小作米400俵(約20町歩)、文政7年(1824)には小作米2400俵(約100町歩)を取得し、幕末から明治期には1000町歩余りの土地、小作3,000軒を所有する大地主となる。

明治になってから家業を拡げ、薬局、醸造業、病院、銀行なども経営し、下越地方に多くの影響力を持った。

今井家が明治20年代に建てたレンガ造建物2棟が遺り、現在も使用されている。うち1棟は、「香林堂」とレンガ壁に大きく白塗りされた建物で、寄棟、瓦葺き2階建て。屋根に銅板製の六角形の印象的な塔屋が載っている。香林堂は今井家が経営している薬舗店名で、その後、家庭用配置薬と味噌醸造業を営み、現在(2018)は廃業し、ご子孫が住まわれている。昭和2(1927)年にオーバーローンを脱した上で、同7(1932)年に六十九銀行(現北越銀行)に営業譲渡している。

戦後の農地改革でそれまで所有してきた広大な農地を手放す。

幕末、河井継之助は、横浜でガトリング砲二門とフランス製旋条式のエンフィールド銃2000挺の武器一式を一万両で米国の武器商人エドワルド・スネルから購入し、その迅速な決済を、越後で、今井家が請け負った。財政改革なった長岡藩の信用力もさることながら、今井家の取引情報伝達網・即時資金力も、すごいと思う。また、ドイツ国の武器商人エドワルド・スネルと、どのような仲介役を介して商売をしたのか、大変興味の湧くところである。

エンフィールド銃は、まだ先込方式で、元込めではない。アメリカの南北戦争では、信頼性が高いエンフィールド銃が“世界の工場”だったイギリスで大量生産され、アメリカの両軍に供給された。1866年以降は一体型の実包を使うスナイドル銃(Snider-Enfield)への移行が進められた。日本では幕末に大量に輸入され、戊辰戦争では新政府軍の主力小銃となった。

西川・蒲原舟道、新潟蒲原往来

今井家の経済活動を支えたのが、西川・蒲原舟道と新潟蒲原往来だと 思います。これがなければ、新潟湊と三国街道が直結できないことになり、 物流の要めです。

### 西川の由来

400年程、この西川は信濃西川、現在の信濃川は信濃東川と呼ばれており、 直江工事をきっかけに信濃川の主流が次第に東川になったという。 その後、次第に西川は用水の供給を主とする河川となった。

現在の一級河川西川は燕市大河津で信濃川から分派し、新潟市西区 平島で信濃川に合流している。過去に西信濃川と呼ばれていた記録も あり、直江兼続の直江工事以降、信濃川が幾度となく流路を変えたなかで、 一番西側を流れていたときの跡であるとも言われている。

### 西川の水運

以前、西川は新潟港と西蒲原地域を結ぶ動脈だった。江戸時代には蒲原 舟道と呼ばれる川船株仲間が36隻の大型川船をを使用して西川舟運に 従事していたらしい。年貢米や商人の荷運搬のほか渡し船もあり、明治時代 には新潟から吉田(現燕市)まで蒸気船が運航していたときもあった。

現在は、舟運はなく、主として上水道、かんがい用水の供給など利水面 で地域にとって貴重な河川となっている。

### 蒲原舟道

寛永年間(1624-44)の家光の時代に成立。

最初のころは新潟が運用していたが、長岡・西福寺が運賃米の中から 五斗づつ藩に上納するという約束で年貢米の輸送を引き受け、蒲原 舟道から西福寺に管理が移り、その翌年から長岡舟道がやることに なった。これが50年続き、また蒲原舟道が担当することになったという。

### 北国街道横道としての新潟蒲原往来

北陸道は、古代より都から北陸地方を通り、越後から佐渡に通じる道。 江戸時代には北陸街道と呼ばれるが、この時は加賀の金沢から越後の 高田まで。高田から出雲崎・弥彦を通り、新潟湊までが北国街道と呼 ばれていた。

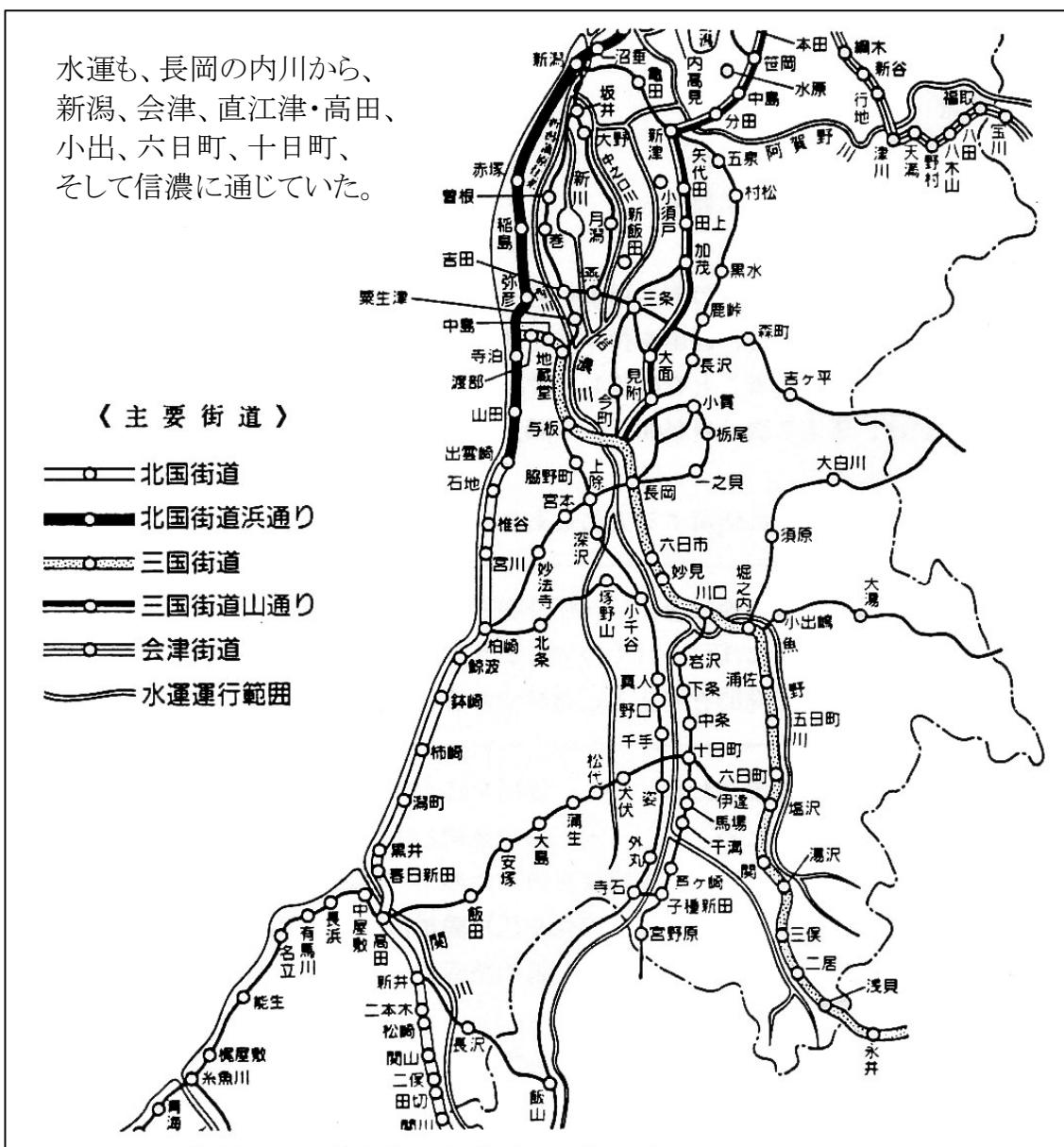
地蔵堂から西川沿いで新潟湊までの道は、北国街道横道・新潟蒲原往来 と呼ばれた。現在の国道116号線は、この道の東側にほぼ平行した道路 である。そして柏崎で、国道8号線に合流する。

## 越後の舟道と街道の図

水運も、長岡の内川から、新潟、会津、直江津・高田、小出、六日町、十日町、そして信濃に通じていた。

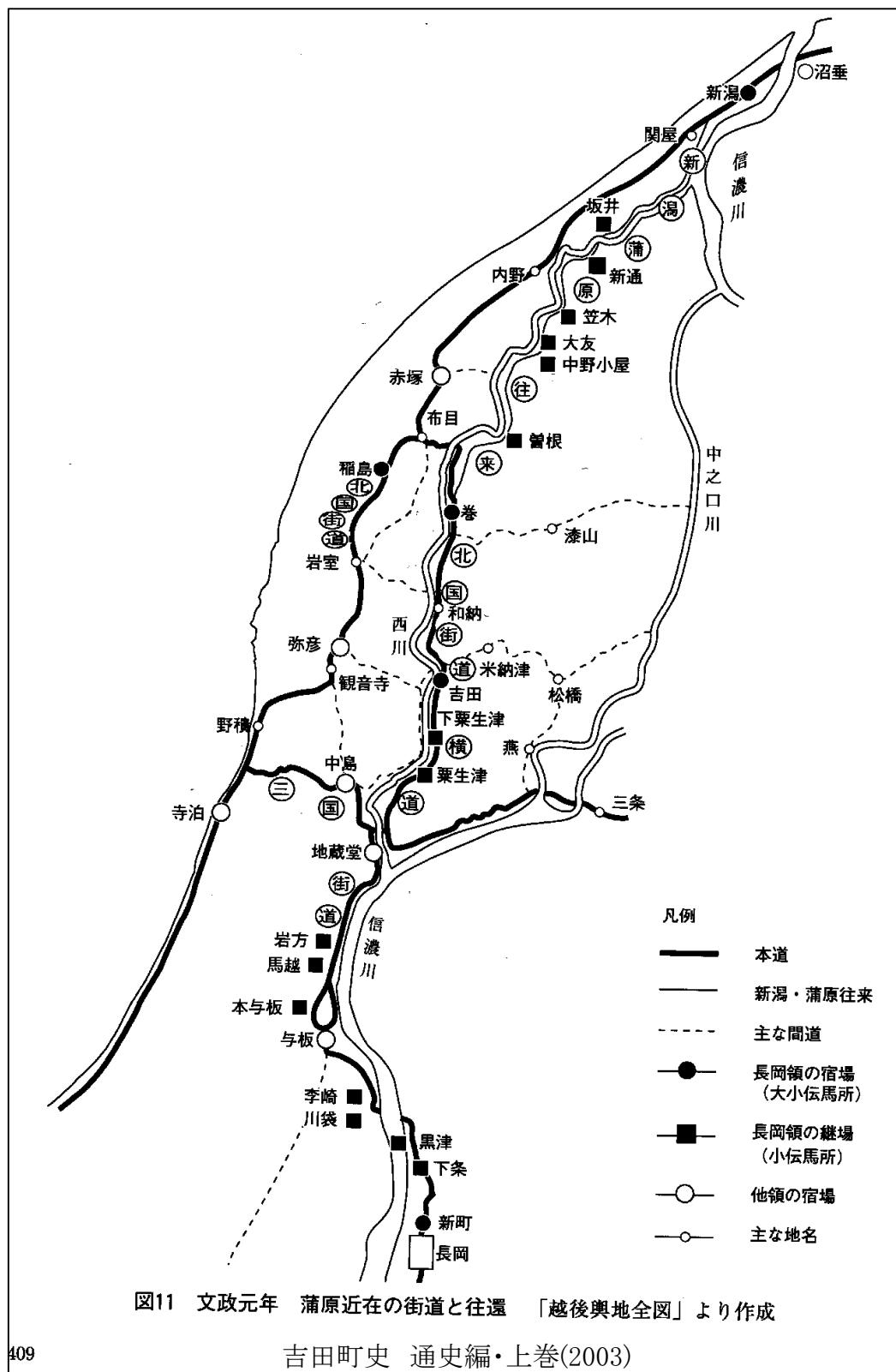
### 《主要街道》

- 



長岡市史 通史編 上巻

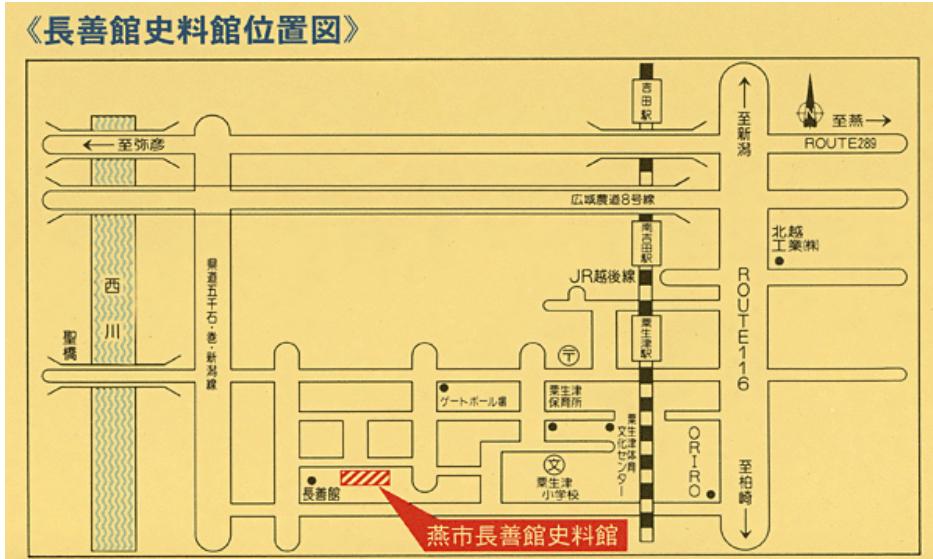
## 街道図



2. 長善館(ちょうぜんかん)は、江戸時代後期、越後長岡藩栗生津村(維新後は新潟県西蒲原郡栗生津村、現燕市)に存在した私塾である。維新後も継続し、その英語、数学などの教育レベルは当時の旧制高校のレベルを超えたものもあるという。

<http://www.city.tsubame.niigata.jp/school/029000037.html>

〒959-0227 新潟県燕市栗生津97番地 電話番号 0256-93-5400



長善館(1833開館～1912, 明治45年閉館)



栗生津小学校うら

栗生津657



天保4年(1833年)に漢学者鈴木文臺によって創設された。明治45年(1912年)まで約80年間、北越を中心に千人以上を教育した。明治22年(1889年)8月の文部省官報では、三餘堂と共に北越の「私学の双璧」とされている。昭和42年(1967年)には長善漢学塾資料283点が県指定文化財となった。

現在、跡地には史料館があり、長善館や鈴木家についての資料に加え、1837年に落下した米納津隕石のレプリカを展示している。

#### ・戊辰戦争と長善館出身者

戊辰戦争の際、長岡藩は河井継之助の指揮の下、奥羽越列藩同盟に加盟し、新政府軍と戦端を開き、北越戦争が勃発した。しかし長岡藩にあっても河井の方針に従わず新政府軍に与した勤皇主義者が存在し、その中に長善館出身者が多くいた。長善館出身者の高橋竹之介らは、1864年(元治元年)方義隊(後に居之隊と改名)を結成し、同じく長善館出身の長谷川鉄之進も幹部に加わった。他の長善館出身者に窪沢円一、柳下安太郎などがあり、館主の惕軒自身も関与していた。

戊辰戦争が始まると、高橋らは長岡藩の情勢を新政府軍に報告し、小千谷談判決裂の一因となったとも言われている。文臺は彼らの活動を良しとしていなかつたらしく、文臺と惕軒の間に確執があったことが惕軒の日記からうかがえる。

一方長岡藩に従軍した長善館出身者もいた。長谷川泰は河井継之助に見出されて長岡藩の軍医(三人扶持)となり、戦傷者の治療に当たった。左足に重傷を負った河井を最初に診たのも長谷川であったが、治療の甲斐なく、河井は死去する。

長善館出身のもう一人の医師竹山屯は官軍に属し、後に高崎藩の藩医となったから、後の新潟を代表する著名な医者が敵味方に分かれて従軍していたことになる。

<http://www.city.tsubame.niigata.jp/school/029000036.html>

大漢和辞典の著者諸橋轍次博士から「越北之(えつほくの)鴻(こう)都(と)」の名を寄せられた、私塾「長善館」。

凡そ30年の間、越後に住んだ良寛様は、水禍と重税にあえぐ農民を見て、は出来ないものかと考えます。その思いを受けて開学した長善館は、代々革新的な教育を行い社会に役立つ実践型の人物を育てました。

休館 月曜日(ただし、月曜祝日の場合は翌日)、年末年始

入館料 (一人につき) 一般…100円、小・中学生、高校生…50円

#### ・明治期における、独自な中等教育カリキュラムの模索

## ～池田先生の関連論文より抜粋

開塾から幕末・維新期には、他の漢学塾同様、地域指導者層育成が目的の中心であったと思われる。

しかし、維新後、公的な初等教育・中等教育の発展とともに、長善館を代表とする先進的漢学塾の進路が、揺らいでいく。

ここでは、さまざまな研究報告をもとに、簡単にその動きをまとめた。

長善館と同年代の子弟を対象に中等教育を施す学校も近隣に存在しており、1883(明治16)年の統計で比較すれば、郡中学校が40人、明訓学校が94人の生徒数に対し、長善館は漢学単科だが72人という両校に劣らない塾生を集めていた。

周辺地域に中等教育学校が存在したにも関わらず、長善館は漢学教育の側面で権威ある地位を保ち多くの塾生を集めていたのであり、その背景として地域指導者層がその漢学教育に中等教育学校では果しえない役割を期待していたことが推測される。

一八八五年と一八九二年の二度にわたる長善館の教則改訂は、ノンフォーマルな教育の展開可能性を見出そうとするものと言える。一度目の八五年改定は、「地域の公立中学校への不信」から周囲に期待されて行われたものであり、そのカリキュラム編成は中学校の「代位」と呼ぶにはあまりに「自主的」に構想され、独自な編成をもっており、「初等教育の「補充」「補完」には収まらない。在京の著名な私立学校、中学校や大学予備門と同等の水準をもち、かつ編成者独自の考えが加味された普通学科であった。

二度目の九二年改訂は、その教育水準はフォーマルな教育機関から独自なものを維持しつづけていたと評されている。長善館が地域からの地域指導者層育成への期待を受けて、フォーマルな学校体制から距離を保った独自の中等教育を構想していたことが明らかであるが、時代の流れに抗しきれず、やがて、その役割を終えることになる。

### 3. 鈴木家の人々、長善館の出身人物

#### (1) 鈴木家の人々

鈴木文臺(ぶんだい・陣蔵、1796年-1870年)

初代館主。38歳のときに近隣の子弟を集めて漢学を教えたのが長善館の始まりである。

後に長岡藩主に召され、藩校崇徳館を督したという。一代士分となり、1867年、殿さまより槍を賜った。良寛との親交でも知られる。良寛は、文臺より三十八歳年上であったが、良寛が和島に移るまでの10年以上に渡り、親しく学んだという。

その8年後、自宅に開塾。(良寛の没後、2年目の1833年)

鈴木惕軒(てきけん・健蔵、1836年-1896年)

二代館主。小千谷片貝の小川家に生まれ文臺に師事し、後に文臺の二女菊子と婚姻、長善館を継ぐ。子に柿園・彦嶽・豹軒。

鈴木柿園(しえん・鹿之介、1861年-1887年)

惕軒二男(戸籍上は長男)。長善館で教授し、また西蒲原中学校の漢学教師ともなった。若くして歿。

鈴木彦嶽(げんがく・時之介、1868年-1919年)

三代館主。惕軒三男(戸籍上は次男)。明治22年7月、東京専門学校英語科修了証が残されている。東京専門学校は早稲田大学の前身、授与者名は2代校長の前島密。長善館閉館後は栗生津郵便局初代局長。

鈴木懿介(1875年-1926年)

惕軒七男。弥彦神社禰宜の高橋家八十二世を継ぐ。

鈴木虎雄(ひょうけん・豹軒、1878年-1963年)

惕軒八男(戸籍上は五男)。古典中国文学者、京都大学名誉教授、文化勲章。

妻は陸羯南(くが かつなん 国民主義の政治評論家)次女・鶴代。

四歳から八歳に小学校で学び、その後長善館で学んだうえ、東京に遊学。

\*栗生津の小学校は明治六年に開校している。

\*史料館には、虎雄が十二歳の正月に書いたという書がある。文字と云い、内容(新年の抱負と親への感謝)といい、大人のものであった。

詳細別記。

鈴木脩蔵(青村、1897年-1977年)

彦嶽の長男。岩手県知事(官選)を務めた。

(2) 二代館主 惕軒の文臺の跡を継ぐ覚悟、柿園・彦嶽時代の教授範囲の拡大  
惕軒の文臺の跡を継ぐ覚悟

唐天神図を含む、天神様の軸装三幅対

天親図、文台の漢詩と天親図、

惕軒の文台漢詩謹写と中国服の天神図

文学百世儒宗

忠節萬代臣則

孩童馬夫崇称

四海九州廟食

最初の二行の意味は、

古典の学問とは、のちの世まで人の師として

仰がれる儒家の学問であり、真心で主君や

国家に尽くすということは永久に変わらない、

人として守るべき道である

惕軒は、文台の漢詩の「萬代」を「萬世」と変えている。 文台の教えを将来も  
変えることなく守るという気持ちを込めたと云われる。

柿園・彦嶽時代の教授範囲の拡大

柿園が江戸遊学から帰国後、英語教育を開始し、彦嶽の時代には、  
英語、数学の教授も盛んとなつた。

各学年の科目内容を見ると、最終の六学年では、数学は現在の高校数学の  
レベルに近く、英語は大学学部に相当するように感じます。

英語は、入塾二年目から始まり、すぐ長文の英文読解が課されています。

当時、備されつあつた学校制度と長い間を併立し、明治45年まで続いたとい  
ふことも、さもあろうと理解できます。

鈴木彦嶽の東京専門学校英語科修了証書（明治二十二年七月）の展示

一時期養子に出ていた、小林時之助の名、

修了証書の校長名は、二代校長の前島密。

東京専門学校は、1882年（明治15年）、大隈重信により設立された私立学校。  
現在の早稲田大学の源流で、イギリス流政治学の教育に重点をおいた。

(3) 鈴木 虎雄 (1878年(明治11年)1月18日 – 1963年(昭和38年)1月20日)

古典中国文学学者。新潟県西蒲原郡粟生津村(のち吉田町、現在は燕市に合併)出身。燕市名誉市民。

1919年(大正8年)京都帝国大学教授、1938年(昭和13年)に名誉教授。1939年(昭和14年)より帝国学士院会員。1958年(昭和33年)に文化功労者、1961年(昭和36年)に文化勲章受章。

日本における中国文学・文化研究(中国学)の創始者一人で、東洋学における京都学派の発足にも寄与した、著名な弟子に吉川幸次郎と小川環樹らがいる。多くの古典漢詩を訳解を著述し、自身も漢詩を多く作成した。号を漢詩では豹軒、和歌では薬房と称し「豹軒詩紗」、「薬房主人歌草」などがある。

鈴木虎雄と同年1961年(昭和36年度)の文化勲章受章者は、

川端康成(小説)	堂本印象(日本画)
鈴木虎雄(中国文学・漢詩・和歌)	福田平八郎(日本画)
富本憲吉(陶芸)	水島三一郎(化学) 日本の構造化学の先駆。

一年後の1962年(昭和37年度)

梅沢浜夫(微生物学)	中村岳陵(日本画)
奥村土牛(日本画)	平櫛田中(木彫)
桑田義備(植物細胞学)	

また前年の1960年(昭和35年度)には

岡潔(数学)	田中耕太郎(商法・法哲学)
佐藤春夫(小説・詩)	吉川英治(小説)

尚、堀口大學は、1979年(昭和54年)に文化勲章。

長善館史料館を訪問した折、保存教室の鴨居に、鈴木虎雄を表彰する小川環樹名の掲示額が掛かっているのに気づきました。

京都学派のひとつを見る思いでありました。

それらを含め、以下に鈴木虎雄、小川環樹両博士の簡単な説明をします。

幼少時は長善館で父惕軒に師事する。上京後、東京英語学校、東京府尋常中学、第一高等中学校で学び、1900年(明治33年)、東京帝国大学文科大学漢学科卒業。同大学院中退後、日本新聞社、台湾日日新報社、東京高等師範学校(東京教育大学、筑波大学の前身)講師・教授などを経て  
 1908年(明治41年)に新設間もない京都帝国大学文科大学助教授に就任。  
 1919年(大正8年)には教授、  
 1938年(昭和13年)に名誉教授。  
 1939年(昭和14年)より帝国学士院会員。  
 1958年(昭和33年)に文化功労者、  
 1961年(昭和36年)に文化勲章受章。

日本における中国文学・文化研究(中国学)の創始者の一人で、東洋学における京都学派の発足にも寄与した、著名な弟子に吉川幸次郎と小川環樹らがいる。その京大東洋学の先駆者に、京都大学名誉教授。文化勲章受章者の羽田 亨(はねだ とおる、1882年 - 1955年)氏がいる。

小川 環樹(おがわ たまき、1910年10月3日 - 1993年8月31日)  
 日本の中国文学学者。字は士解。京都府京都市出身。  
 主著に「唐詩概説」、「蘇軾」など、初心者向けの啓蒙書や訳書も多数著している。  
 地質学者・小川琢治の四男。  
 長兄は小川芳樹(金属工学・冶金学)。次兄は貝塚茂樹(東洋史学)で共編著がある。  
 三兄は湯川秀樹(物理学、日本人初のノーベル賞受賞者(物理学賞))。  
 なお、末弟の小川滋樹(ますき)は第二次世界大戦で戦病死している。  
 1938年 東北帝国大学講師  
 1939年 同助教授  
 1947年 同教授  
 1950年 東北大学退官、京都大学文学部教授  
 1965 - 69年 京都大学人文科学研究所教授も併任。  
 1967年 京都大学文学部教授(中国文学科講座主任教授)(吉川幸次郎の後任)  
 1974年 同大学定年退官。その後、京都産業大学や佛教大学でも講義をした。  
 1989年 日本学士院会員。

鈴木虎雄 12歳で上京するにあたり、詠んだ書（入場券のデータ化）

とても12歳の子供の書とは思えないです。五十六記念館の15歳のときの手紙の書を拝読したときよりも衝撃的でした。

千里 辞親游帝京自期磨  
琢大成名不知水錦帰郷日  
一笑把盃詰此情

鈴木虎雄

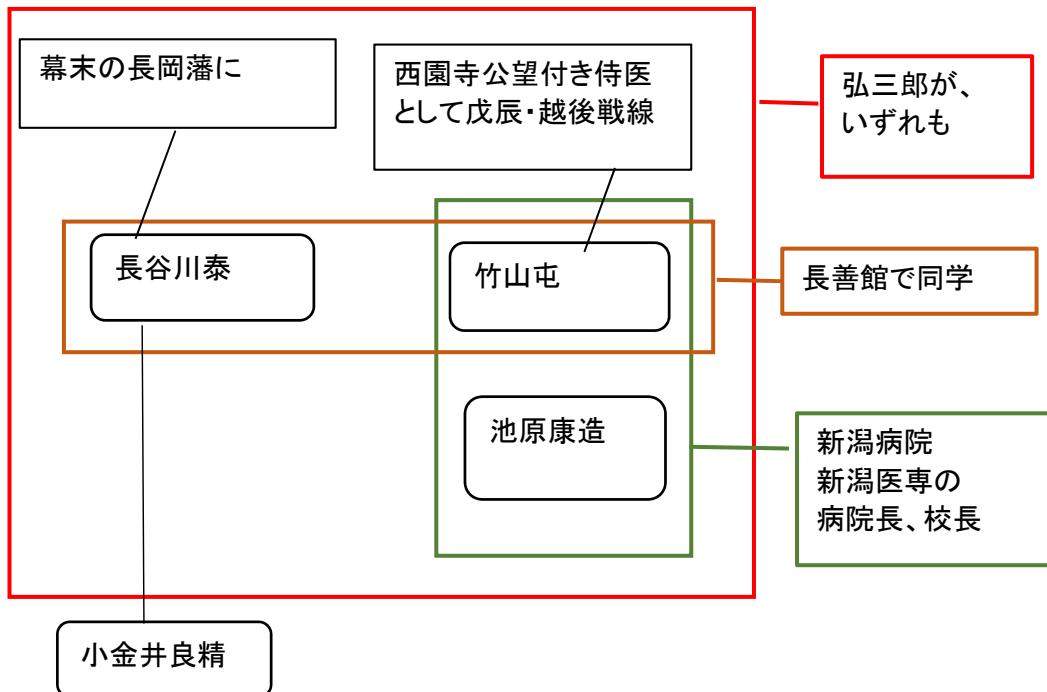
【訓読】

千里 親を辞して 帝京に遊ばんとす  
自ら磨琢して 大成の名を期さん  
知らず 錦を衣て 郷に帰るの日を  
一笑して 盃を把り 此の情を話す

【大意】

遠く親元を離れて、東京に学問の為に  
向かいます。  
自分で切磋琢磨し、大いに功を成しとげ、  
大人物と言われるよう努力しよう。  
いつの日であろうか？  
出世し、錦で着飾つて故郷へ帰るのは…  
お笑いぐさに、別れの杯を交わしながら、  
私の本心を話しますよ。

## 竹山屯・長谷川泰・池原康造の三人の関係、生歿年・作像年



武石弘三郎は、戦前に竹山屯・長谷川泰・池原康造の三人の像を製作している。現在、竹山屯の大理石像、池原康造の復元銅像が、新大医学部キャンパス内の医歯学図書館記念室、池長谷記念館前に、それぞれ配置されている。

長谷川泰 1842年-1912年 (作像 T5 1916)  
竹山屯 1840年-1918年 (作像 T15 1926)  
池原康造 -1916年 (作像 T7 1918)

竹山屯(1840-1918)の受けた教育

姉の杖(結婚後、唯と改名)は、  
入澤恭平(1831-1874)の妻、  
入澤達吉の母。  
達吉は大正天皇侍医頭。

竹山甫祐(1798-1871)の四男。  
若月元輔・藍沢南城・鈴木文臺に学ぶ。  
江戸で漢詩文の遊学。  
入澤恭平(1831-1874)に学ぶ。  
長崎精得館に留学。

小金井良精 1859- 1944年

銅像の記述は見当たりません。

東京大学医学部初代解剖学教授  
長谷川泰の父・宗済は長岡随一の漢方の名医と呼ばれ、  
若き日の虎三郎も掛かり付毛であったらしい。  
虎三郎の甥・小金井良精は、長谷川泰の手引きにより  
東京の大学で医学を学ぶ機会を得た。  
森鷗外の妹婿でもある。

## (4) 長善館の出身人物

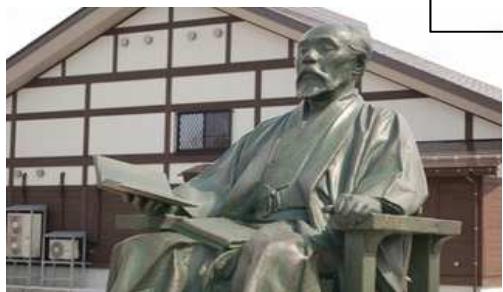
長谷川泰

北越戊辰戦争伝承館と長谷川泰像

<http://www.museum.city.nagaoka.niigata.jp/sisetsu/boshin2.html>



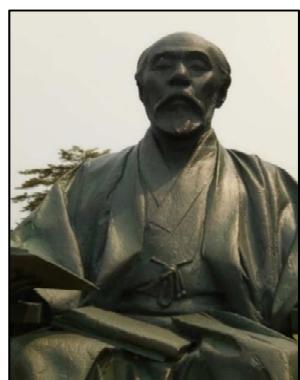
8号を北進、新幹線と交差して次の交差点(新組南)を右折。そして猿橋川を渡つてから少し戻る方向。  
(志田材木の東方向)



新組地区に平成24年4月18日に除幕された「長谷川泰翁像」  
その目線は、福井町の生家跡と、母校「長善館」の方角。



戦時供出されて、今はいい、  
武石弘三郎作の湯島天神・  
長谷川泰像 大正5年[1916]



北越戦争で河井継之助に三人扶持で雇われた。  
長岡藩に藩医として従軍し、河井継之助の最期を看取った。

銅像の制作者は、長岡市在住の峰村哲也さんです。  
峰村さんは、東京の日本医科大学を訊ねるなどして、長谷川泰の精神を探りながら制作されたとのこと。

＜峰村哲也さん作歴＞

昭和31年生、東京芸大大学院博士課程終了。  
「良寛さん遊ぼ」(西大畠公園)  
「河井継之助像」(河井継之助記念館)  
「生きる一母子像」(長岡戦災記念館)

<http://blog.canpan.info/taisensei/archive/410>

＜長谷川泰先生像建立の趣意書＞

日本の医学の父ともいわれ、長岡が生んだ偉人、長谷川泰先生没後百年を期に、先生の概略を述べ遺徳を偲びたいと思います。

長谷川泰先生の家は、代々医学者としての家柄であり、泰先生も、幕藩時代に江戸医学所に学び、医師になった時に、戊辰戦争が始まり、長岡藩の軍医として従軍し、負傷者や多くの住民達の救済に当たった。

戊辰戦争終了後、東京に戻り、東京医学校々長を始め、数々の医学校々長を歴任した後、済生学舎(現在の日本医科大学)を開設し、医学生の教育に情熱を燃やし、野口英世博士や吉岡彌生先生ら、多数の有名医学者を輩出した。政界においては、伝染病対策として、政府に請願し、日本で初めての下水道法を制定させ、北里柴三郎博士の研究成果を早く認めると、伝染病研究所開設の強力な支援者となつた。前記の偉業に対し、大正五年に湯島天神の境内に長谷川泰像が建立されたが、太平洋戦争の最中に徴収され、現在に至っている。長谷川泰先生の心底にあった、「広く民衆を救う」という済生救民の心情が、同意の若者を育てたものと思われる。

この度、特に長岡市民の皆様や、医学界の方々より、先生の出生地に像を建立したいと日々に切望する声が大きくなりましたが、多くの人々にこの偉業を永く伝承して頂きたく、ここに趣意書を作成し、末永く遺徳を偲ぶ糧にしたいと願うものであります。

発起人代表 新潟県議会議員 星野伊佐夫  
発起人 長岡商工会議所会頭 丸山智  
発起人 長岡医師会々長 太田裕  
発起人 中央綜合病院々長 吉川明  
発起人 長岡管工事組合長 室橋一司  
発起人 郷土史研究家 稲川明雄  
発起人 燕市長善館研究家 吉田勝  
発起人 新潟県生活衛生同業組合連合会々長 小林弘昌  
発起人 長谷川泰を語る会代表 恩田利平太

＜主管＞郷土の偉人長谷川泰を語る会

新潟県長岡市新組町5331-1 電話0258-24-3123  
(愛輪商事内/事務局)

完成後の寄付者プレートには、  
北里研究所理事長として、大村智氏の名前もある。  
像建設の三年後、大村智先生がノーベル医学生理学賞のニュース。

## 竹山屯

戊辰の役当時は、西園寺公望付きの侍医として越後を従軍し、戦後、公望が京都に戻るまで、付き添った。



武石弘三郎作 竹山屯像  
(戦前の製作だが、幸いに現存)  
平成30年の春、竹山家のご厚意  
により、この大理石像が、  
新潟大学に寄贈され、  
医学部図書館三階の資料室に、  
竹山文書とともに、保管展示されている。



明治36年新築の往時の建物  
当時は、「日新堂」と称したらしい。

(財)医療法人 竹山記念会 竹山病院  
〒951-8068  
新潟市中央区上大川前通6番町1183  
TEL:025-228-7171  
東大通りを万代橋を渡って  
上大川前通角、住友信託の西側  
現在の建物は、平成10年建設の大病院。

～ 実際に訪問して拝見したが、大理石の肌理が見え、美しく且つ巨大な像である。  
まさに圧倒的な存在感でした。  
医学部図書館に隣接する池原記念館の前庭には、同じく武石弘三郎作の  
池原康造のブロンズ像があり、こちらも大きな像です。(こちらのオリジナルは  
戦時金属供出で現存せず、現在の池原像は戦後の復元像です。)

同病院ホームページより  
竹山病院は新潟市の上大川前通りにある。信濃川にほど近い市の中心部である。  
約千坪の土地に、外科、内科、婦人科あわせて六十床の木造の病院と、院長の  
竹山正男の私邸と土蔵が二つ建っている。(荻野)久作が就職して4年目の大正四年、  
石造り二階建ての本館が落成した。<篠田達朗著『法王庁の避妊法』より引用>  
竹山病院の起源は明治18年(1885)、竹山屯(たむろ)が、信濃川にほど近い市の  
中心部である新潟市上大川前通り6番町に「日新堂」と称する医院を開業したのに  
始まっている。  
明治36年には、娘婿である沢田敬義(のちに新潟医大教授となる・新潟市名誉市民)  
を迎えて内容・外観ともに新潟市の一偉観と称せられた洋館の病院を新築した。  
これを期に竹山病院と改称した。  
明治41年の新潟大火の際に類焼したが、仮建築をもって対応し、大正4年～大正  
13年の期間に増・改築を行ない今日の旧館を本館とした外科・内科・産婦人科  
あわせて60床の病院の形態が整った。  
昭和11年、第2次世界大戦に際して救護病院に指定され公的医療機関としての  
性格が強くなり、当局の勧誘に従い昭和20年8月より「日本医療団」に経営を移管した。  
戦後、昭和25年9月「日本医療団」が解散し病院の返還を受けるに当たって、  
当主竹山初男が父祖伝統の精神に鑑みると共にその光栄を記念するために寄付行為に  
依り財団医療法人を組織し、医学の研究を行ない、病院を開設して社会福祉の増進に  
寄与すべく医療法人「竹山記念会」を設立した。  
昭和30年の新潟大火にて全館類焼したが、2ヶ月後に病院を再開し、住民の医療に  
尽くした。昭和32年に本建設となつた。  
平成10年には6階建ての産婦人科を中心とした新病院が完成し、現在に到る。  
このように、120年以上にわたって時代の変遷と地方の実情に即して設備と内容を  
整備し、地域医療に専念してきた歴史のある病院です。



竹山 圃(たむろ)

慶応元年長崎に留学して医学を学び、新潟県医官となり、新潟医学校長(現新潟大学医学部)の職に就いて医育に尽瘁し、特に明治11年明治天皇の北陸巡幸に際して越後に入つてから沿道の住民に目の悪い者が非常に多い

事に気付かれ病院長にご下問があり、その原因を当時として非凡な卓見をもつてこれに奏上したことにより、ご下賜金を賜り眼疾の治療及び予防に尽くすようご沙汰があり、これを記念した石碑が現在も新潟医学所跡地に建立されております。(～未確認) 竹山病院開設者。

当時の婦人科医長が荻野博士。

荻野久作(第3代竹山病院院長、竹山記念会初代理事長)は、1882年(明治15年)3月25日愛知県八名郡下条村(現豊橋市下条東町)の農家の次男に生まれ、幼少から成績優秀でその秀才ぶりを認められ、1900年(明治33年)愛知県幡豆郡西尾町に住む漢学者の荻野忍に望まれ養子になり、豊橋尋常中学時習館に進み養父のはからいで1902年(明治35年)に東京麹町区私立日本中学校4年生に編入転校し、1905年(明治38年)第一高等学校を卒業し養母の勧めで医者を目指し東京帝国大学医学部に入学。1909年(明治42年)卒業後は、産婦人科教室(木下正中教授)に入り、母校で研究に励み、1910年(明治43年)に大学副助手として附属病院に勤務した後、経済状態の苦しい荻野家では生活を支えられず1912年(明治45年)東京帝国大学医学部長入沢達吉教授、後の大正天皇の侍医頭(竹山病院初代院長屯の姉の子)の推薦で新潟にある竹山病院の産婦人科医長として働くことになる。同時に新潟医大の病理学教室にも籍を置き、川村麟也教授のもと、排卵学説の研究を完成する。1929年(昭和4年)まで足かけ8年間病理学教室に在籍。一民間市中病院の産婦人科臨床医でありながら偉大な足跡を残した、その主要な業績は、排卵、受胎の時期に関するいわゆる「荻野学説」の提唱であり、また他方、子宮頸癌に対する「岡林術式荻野変法」の確立である。なお、これらの業績により、第二回世界不妊学会名誉会長、ブラジル産婦人科学会名誉会員、日本産婦人科学会名誉会員、新潟市名誉市民、勲二等旭日重光章、紫綬褒章、日本医師会最高優功章、朝日文化賞、第四銀行賞など様々な栄誉を受けている。1975年(昭和50年)1月1日自宅で妻トメにみとられ93歳で逝去1月19日新潟市公会堂にて新潟市と竹山病院合同葬儀自宅前の市道が市民の発意で「オギノ通り」と名付けられる新潟下町日和山共同墓地に眠る現竹山記念会 竹山病院理事長 竹山 功は荻野久作の孫であり、「地域のための医療」の精神は脈々と現在も引き継がれている。



大竹貫一記念館に慶事の大竹 貫一年表による。

大竹 貫一(万延元年(1860年)～昭和19年(1944年))

大竹の生まれ育った中之島町は、刈谷田川、猿橋川が、本流の信濃川に合流する地域で、沼地も多く、たび重なる洪水禍にうちひしがれていた場所。

打ち続く水禍のなかで育った大竹は、新潟県英語学校に入学し、治水に関する知識を得るために土木工学を専攻。村会議員から県会議員、衆議院議員へと当選。

大竹は、郷里刈谷田川を改修して氾濫を防いだり、大堰を築いて用水としての利用を図るなど、地域住民の安全な暮らしのために尽力。

大竹は、南蒲原・西蒲原地方を信濃川の洪水から守るには、大河津分水の完成が抜本的な解決策であると考え、自ら資産を投じ工事の進捗を図った。

明治・大正・昭和の激動の時代を生きた大竹貫一は、名利を求めず清貧に甘んじ、ひたすら国と郷土発展のために尽くし、その功績は郷土の誇りとしていまも語り継がれている。

大竹貫一像は、昭和31年大竹邸保存会が建てたもの。

1860年(万延元年) 中之島町に新発田藩中之島組大肝煎(大庄屋)に生まれる。

第九子、六男

1867 済美堂 若月元輔に漢学の素読を学ぶ

1868 戊辰の役で中之島も戦禍。父は官軍側につき、自宅が長岡軍により焼失。

本与板の斎藤三郎の青根書院に1870年2月まで入塾。

1871 12才 長善館に入塾。

1872 健康を損ね、一時帰郷し、叔父の塾で助手。再び長善館。

地租改正事務にあたる。

1873年5月 新潟学校に入学し、翌年7月まで和漢、数学を学ぶ

1874年 15才 新潟英語学校が創立し、入学

1877 明治10年 18才 東京に遊学

1878 久須美秀三郎の妹 ツネと結婚

1879 杉の森の高橋竹之介の塾に学び、生涯の同志、頭山満と出会う

1880年 明治12年 21才村会議員、以後県議・参議院議員。 終始、野党。

1904年7月 対露同志会 に頭山満とともに主要メンバとして参加。  
 ロシアとの早期開戦論を唱えて運動した日本のアジア主義・国家主義団体。  
 会長は近衛篤麿・委員長は神鞭知常。  
 神鞭 知常(こうむち ともつね)は明治時代の官僚、衆議院議員。

1904年2月-1905年9月 日露戦争  
 (明治37-38年)  
 1905年9月 日比谷焼き討ち事件 死者17名、検挙2000名、  
 うち起訴されたもの308名。  
 日露戦争の講和条約ポーツマス条約に反対する国民集会を  
 主導した嫌疑で捕縛。 後に無罪釈放。

1912 53才 ツネ死去

1883 24才 中之島～灰島間の道路建設に私財を投じる、後の国道8号になる。  
 1890 県議。  
 1896 明治16年 37才 横田切れ  
 大河津治水策を国に大運動。  
 1922 大河津 初通水  
 1931(昭和6年) 72才 大河津分水完成

1944年(昭和19年) 死去

・お互いに、親戚関係を結んでいた  
 大竹家、竹山家をはじめ、当時の名家は、小国・山口家、蒲原・入澤家、  
 和島・久須美家などと、婚姻や養子縁組などを通じて、お互いに親戚  
 関係を結んでいたことを知るようになりました。  
 星野嘉保子の実家である蒲原・小川家も、分水・竹山家とつながりを  
 持っていました。

## そのほかの、長善館の出身人物

木曾惠禪 文化十四年(一八一七)～明治二十九年(一八九六)

燕市砂子塚 僧侶 教育者

十二才で入門。文台先生に経史を学ぶ。十七才新井市正念寺勸学朗師について修業し、長岡長永寺を継ぐ。さらに京都で本山学林で刻苦研鑽した。天保十二年教学振興について意見が合わず帰国。弘化二年、実践窮行を塾として境内に私塾「囂外齋(こうがいこう)」を開設し、僧俗の子弟や郷子弟に仏学や漢学を教えました。

遠近評判を聞いて蟄学する者が多くたという。

本山からの学階授与の案内も断って育英と布教に捧げた。資性温厚、篤実孝悌、かつ己に謹厳、人に寛容、頗る長者の風があったが、事に臨んでは毅然として対峙した。衆に畏敬され人望高く、行により牧野侯および法王より数度賞賜を受け、明治二十九早死複本山司教を追贈された。

門下に真宗の高僧七里恒順、のちの泉大総長小野塚喜平次らがいる。

長善館で学んだ人間が大河津分水を作った

長善館で学んだ人間が大河津分水を作った.pdf

鷺尾 政直

黒鳥庄村屋見習役を務めた後、中之口川分水口工事、内野底樋普請工事、第一次分水工事などに携わり、土木の知識を得ました。

そして、鷺尾は、第一次大河津分水工事の中止、挫折の体験を通して、「民力」の重要性を意識していました。その後、萩野左門と共に中之口川堤防修築運動に乗り出し、明治14年に「西蒲原郡治水起工議」を著した

高橋 竹之介 詳細は別

高橋竹之介は「北越治水策」という書物を残し、大河津分水、関屋分水、刈谷田川分水を築くべしと記しています。杉之森(長岡市)出身の高橋は、信濃川や刈谷田川の水害で故郷が疲れ果てていることを身にしみて感じていたのかもしれません。

「北越治水策」は弥彦神社の宝物殿に収蔵されています。

高橋竹之介は、北越戊辰戦争で有志と共に新政府軍に加わり、功績を立て、明治維新後は長岡市殿町に誠意塾を開き、多くの人が学んだ。「竹介先生出生之地」の記念碑は、高橋家の屋敷跡に建っている。文字は、彼の教育を受けた頭山満の書。

高橋 竹之介のお墓は、長岡千手の浄土真宗真宗大谷派の寺院、眞照寺。墓石の後ろの碑文は、誠意塾の門人であった武石貞松謹撰の文字。

ほかにも、萩野左門、小柳卯三郎などが大河津分水建設に尽力します。

全員、長善館で学んだ卒業生でした。

#### 4. 日本の中国学を作った人たち

鈴木虎雄と、陸羯南、桂湖村

～陸羯南は、虎雄の義父(日本新聞社)

～桂湖村は、長善館で、虎雄が兄事したという

鈴木虎雄は、京都学派を育てたという。第一世代の内藤湖南らの次に

倉石武四郎、吉川幸次郎、小川環樹らが続く。

諸橋轍次(1883- 1982)は、虎雄が東京高等師範時代に教えた、

恩師と弟子の関係。

このように、世界に誇る日本の中国学、錚々たる中国学学者集団の中心に、鈴木虎雄博士がおられることは、もっと知られていいことだと思っています。

諸橋轍次氏

(もろはしてつじ、1883年6月4日 - 1982年12月8日)

新潟県南蒲原郡庭月村(後に四ツ沢村→森町村→下田村、現在の三条市庭月)に生まれた。1908年に東京高等師範学校を卒業後、漢学の教員として同校に勤める。青年時代、中国にも留学。この時に満足できる辞書がなかったことが、後の名著『大漢和辞典』や『広漢和辞典』(ともに大修館書店刊)の編者。

文学博士。東京文理科大学名誉教授。都留短期大学および都留文科大学の(四年制大学としての)初代学長。本人によると直江兼続の子孫である。三男の諸橋晋六は静嘉堂文庫理事長のほか三菱商事社長・会長も務めた。

長善館跡碑「越北之鴻都」

碑面 越北之鴻都

昭和丙辰初冬 止軒 諸橋轍次

諸橋轍次氏の号が止軒。

碑 陰碑文の意は長善館の事蹟を讃えられた お言葉と解します  
長善館史を尋ねて40年の記念として 之を碑に刻み後世に伝えます

平成4年11月吉日 建碑者 星野甚四郎

補 足諸橋轍次が昭和51年に書した色紙の文字配列を変え  
碑面に刻んだものとされている。

卷菱湖

江戸後期の書家で、「幕末の三筆」と讃えられる。

良寛と親交のあった亀田鵬斎(儒学者)の弟子。

#### 5. 良寛と初代館主「鈴木文臺」

- 1826年 良寛、島崎の木村家内の草庵に移る。  
 1828年 11/12、三条大地震。  
 1831年 正月6日、良寛死去。  
 1833年、当時38歳の文臺、実家の一部を借りて長善館を開く。

長善館を開いた鈴木文臺は3代前から医師を営む家の次男に生まれた。幼少のころから学問に親しみ、18歳のころに講義を行うため出向いた先で良寛に出会った。良寛は文臺の博学ぶりに「この子将来見るべきものあるべし」と目を見張り、そこから良寛と文臺の交流が始まり、2人は38歳もの年齢差があったが、時には手紙で、時には良寛の住む国上山で親しく交わった。より学問を深めるために江戸に留学した文臺にとって、江戸の学校は大きな刺激を受けるようなものではなかったようで、半ば独学で3年ほど学問を進め、さらなる留学の準備をするために実家へ戻った。文臺は、留学の延長を母親に反対され、幼少から儒学などの漢学に親しみ、「孝」(両親や祖先に対する敬意)の念が強かった文臺はそれに従い、留学を断念。地元に戻り、勉学や子弟の教育に精を出すようになった。

当初は寺泊で講師をしていた文臺は、合間を縫って良寛とも親交を深め、また、各地域の私塾を訪問して勉強することで自身の学業を深めていった。良寛が島崎村(現在の長岡市島崎)に引っ越すまで、そうした日々は続き、文臺の勉学は大きく進んだという。

良寛の実家は庄屋をしており、父や弟は人々の生活を顧みない幕府に反発し、追い詰められていった。それを見ていた良寛は、幕府に対して反感を持ちながらも表立った批判はしなかったが、代わりに若い代官や庄屋に対して和歌などを書いた手紙でそれとなく初心を忘れないように、自分の行いを顧みるようにと書き送っている。文臺は、普段接する良寛の言動や、人から見聞きする手紙などの内容から、良寛の考えを知ったのであろう。良寛は苦しむ人たちを見ているため、人々が良い暮らしをでき、の実践を重視したのではないか。

長善館には、文臺の評判を聞いて地域を取りまとめる庄屋の家から多くの人が勉強に来ており、こうした環境で、良寛から学んだ「上に立つものとしての心掛け」が生かされた。

## 高橋竹之介記念館



<http://blog.canpan.info/taisensei/archive/414>

### 高橋竹之介

長岡市中之島町の杉之森公会堂2階には、幕末～明治越後の要人「高橋竹之介」の史料が展示されています。高橋竹之介は外山脩造や長谷川泰と同じ天保13年(1842)生まれ、そして長善館では鈴木文臺の同門ということで、初めて見学に訪れました。

展示室自体は平成22年10月開館ということでまだ新しく、長岡市コミュニティ事業助成では長谷川泰の顕彰事業と同期という縁もあります。

天保13年(1842)高橋竹之介は杉之森の庄屋の次男として生まれました。

20歳の年に長善館に入門していますから、14～16歳ころに在籍した長谷川泰とは時期がずれるようです。長善館には僅か1年程度の在籍で西国遊学に旅立ちますが、後に勤王の志士を輩出する2代目館長鈴木愬軒(てきけん)と交わり、既に世直しを志していたのかもしれません。

そう、高橋竹之介は越後の勤王組織「方義隊(後の居之隊)」の創設メンバーなのです。長谷川泰は河井継之助の抜擢で長岡藩軍医になりましたが、幕末の越後の人々は立場を二つに対立していたのでした。

北越戊辰戦争における高橋竹之介の戦功は目覚ましく、越後を自ら転戦し、地理に疎い西軍諸藩を先導しました。京都での会議では、大久保利通、大村益次郎らに北越での戦略を説くとそれが採用されています。その海路からの増援作戦が長岡城を陥落させましたともいえるでしょう。

戦後、明治新政府の東京遷都に強硬に反対した高橋竹之介は、不遇にも収監されてしまいます。

越後の勤王党は帝による治世の再現に向けて、真心をもって活動を行ないましたが、それは新政府の方針とは相容れぬものであったようです。

出獄後に高橋竹之介が行なったことは教育でした。長岡に開いた「誠意塾」では大竹貫一(国会議員)、武石貞松(漢学者)、堀口九萬一(外交官)ら、600名を超える師弟を教育しました。

戦争を経て焦土から復興した長岡で、竹之介が何を教育したのかには、大変に关心があるところです。

明治29年(1896)「横田切れ」の大洪水で越後平野は大打撃を受けます。

中世、大津波で大半が水没していた越後平野の歴史は治水の歴史でもありました。江戸時代末期に良寛が子を売る農民の苦しみを詠い、さらに時は流れ、明治の文明開化が叫ばれる世の中にあっても、依然として人々は水害に苦しんでいたのでした。

その横田切れ翌年、高橋竹之介は立ち上ります。自ら考案した「北越治水策」を、時の権力者山縣有朋へ向かって建白したのです。帝国議会では教え子の大竹貫一が越後の治水を必死に説いていましたが、竹之介のこの尽力があつてこそ、あの東洋に類を見なかった歴史的な大工事『大河津分水』の建設が成されたのでした。

かつては北越戦争を先頭で指揮した山縣有朋です。そこで高橋竹之介の活躍を知り、大きく信頼を置いていたのでは無いでしょうか。

### 竹之介による大河津分水の構想図

越後を二つに裂いた戊辰戦争を、現在の私たちが知ることは苦さを伴うものです。しかし、高橋竹之介のように新政府への人脈を持つ人物が、自ら教育した越後の後輩を活躍の場へ送る要となっていたことは忘れられません。

同時に、敗者であった長谷川泰や外山脩造、柳野直らが(皆、天保13年生まれです)戦禍の中に立ち上がり新時代を創っていたことも知るべきなのです。

幕末越後の先人たちは強い人々でした。

この度は高橋竹之介顕彰会代表の山本さんにご案内を頂きました。

御当地伝記マンガ「長谷川泰ものがたり」では、長善館のシーンで多一の喧嘩相手に「竹之助」という少年が登場します。ストーリー上で高橋竹之介その人を指すものでは無いのですが、門人リストから同じ年の人物を探して似たような名前をお借りしたという経緯があります。

実在の二人の関わりについては、今後の調査でまたご報告したいと思います。ブログ管理人は、必ず交わりがあったと考えております。

## 誠意塾主・高橋竹之介

Takenosuke wrote a memorial writing to Mishima Okujirou's first memorial ceremony. This memorial writing starts with statement that praised the distinguished achievements in Boshin-war, and continued with the tribute to the reconstruction effort in Nagaoka. Although they had been bitter enemy, they might have thought something in common with.

高橋竹之介は、幕末、尊王志士として京にあり、北越戊辰戦争で有志と共に新政府軍に加わり、最大級の功績を立てた。

越後の勤王党は、天皇による治世の再現に向けて真心をもって活動を行ないましたが、新政府の方針とはあわず、東京遷都に反対の罪で、十年近く投獄のうきめにあった。

ようやく釈放後、新政府の旧知の友を訪ねたが、かつての志をなくした連中のあまりの堕落に失望。

教育の重要さに気づき、越後に戻る。

この間の竹之介の考え方は、明らかにされていないが、察するに余りあるところである。

I can perceive ( imagine ) his surprise.

そして三条で開塾後、長岡の殿町に誠意塾を開き、十数年の間に多くの人材を育てた。

恐らく、三島億二郎とも、片や公共教育のリーダとして、片や私教育のリーダとして、教育方針について、話し合ったであろう。

明治26年(1893)5月の故三島億二郎の追悼会にささげた竹之介の「三島億二郎追悼長句一編」は、億二郎の戊辰の役での功績を讃えた文で始まり、その後の復興尽力への賛辞が続いている。

仇敵ではあったが、相通ずるものがあったのであろう。

この長句一編は、このような文脈で読み解きたいと思います。

(1880-90年代の漢学塾\_誠意塾 を参考にした)

誠意塾は、長岡町殿町に1881(明治14)年に開塾、1901(明治34)年に閉塾。

1842年、天保13年に中之島村杉之森に生。三島郡本与板村に学んだ後に

1862(文久2)年11月に西蒲原郡の漢学塾長善館に入館し、初代館主鈴木文台に一年ほど師事した。

長善館を出た彼は諸国の遊歴をはじめ、尊攘思想に深く傾倒していく。

1867(慶応3)年の帰郷後は、豪農層の草隊であった

三島郡本与板村の斎藤赤城に学んだ後に居之隊の活動に身を投じた。

維新後は、遷都反対を掲げて明治三年逮捕せらる。

明治十二年三月恩赦で釈放。

MfG\_J\_Chozenkan\_and\_Nagaoka

恩赦後は三条、郷里の杉之森、長岡で教育をはじめ、  
1883年には長岡で宿舎を築いて「誠意塾」と名づけた。  
1901年の閉塾。1909(明治42)年に69歳で没した。

高橋は、「自分の處へ学問をするのみで来ると思ふは間違である。本は読まねばならず知り折居ることは教授もするが品行を端整にして雑役も執り粗食もし、など漢籍の教授に限らず、生活面での指導も積極的に行っていた。

集まつてくる熟成は、もともと裕福な家の子弟であるから、「一生涯することのならぬ」ような雑役を命じることで、将来「恩遣り」を持った「人を使ふ」立場に立つ者になるように「訓練」するのである。

そして高橋は「父母の代理として御預りをする」という考え方から、雑役を命じるに限らず「自宅に居り父母の許で我儘」をしがちな生活と遮断するために、子弟の行動に積極的な干渉をしていた。

第一の外出時報告の義務。  
第二の飲食物品購入の厳禁については、「金銭を浪費」させないため。  
そして第三の書信等の検閲。

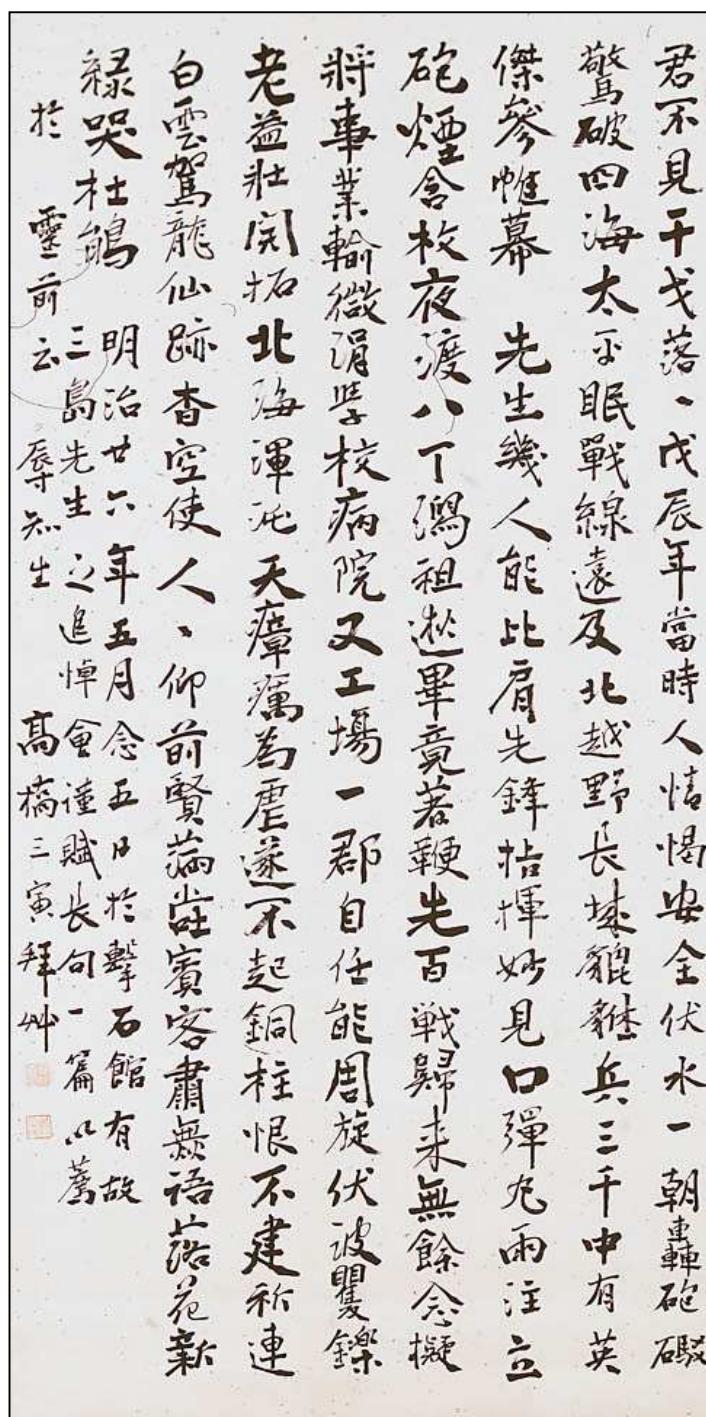
入門した塾生は、四書五経、日本外史、十八史略、文章軌範、…、資治通鑑という順序で、徐々に難易度の高い教育内容に進むことになる。

国家的な時事問題を取り上げて実践への応用を訴える方針は、尊攘活動を積極的に行なつた高橋の理念が最も現れているところであると言われている。

師匠である高橋がすべてのカリキュラム指導に関わるのではなく、その一部分は年長の塾生や塾生の自主性に任されていた。一時期、生徒が数学を教授したこともあったという。

「竹介先生出生之地」の記念碑は、高橋家の屋敷跡に建つていて、  
文字は、彼の教育を受けた、当時の政治家・頭山満の書。

## 高橋竹之介書 「三島億二郎追悼長句一編」



サイズ:  
135.0cm×66.1cm

明治26年(1893)5月5日、故三島億二郎(1825-1892)の追悼会。  
この書幅は、殿町で「誠意塾」を開いていた竹之介(1842~1909)が、  
三島の活動や業績を偲んで作った長句で、この追悼会に捧げられた。  
竹之介は、このとき51才。誠意塾開塾から十五年以上になっている。

戊辰では敵味方に分かれたが、明治18年(1885)、三島億二郎、  
大橋一蔵らと北越談話会を開いて産業文化を振興したという縁もある。  
(北越談話会を開いたことは、燕市教育委員会「長善館ものがたり」p22)

## 関連人物

倉石武四郎(1897年9月 – 1975年11月)

日本の中国語学者・中国文学学者。

新潟県高田町(現・上越市)出身[1]。新潟県立高田中学校を経て

東京帝国大学文学部支那文学科卒業。京都帝国大学大学院で

狩野直喜に師事する。1928年から二年間、北京で学ぶ。

のち京都帝大、東京帝大教授(1940-)を併任する。

戦後、東大文学部教授、1958年定年退官。

清朝音韻学、現代中国文学、中国語学、教育など多方面に活躍。

日中学院を主宰し、NHKの中国語講座にも寄与。

『岩波中国語辞典』の編纂でも知られる。

1971年(昭和46年)に文化功労者。

西脇 順三郎(1894年(明治27年)1月 – 1982年(昭和57年)6月)

日本の詩人(近代詩)、英文学者(文学博士)。戦前のモダニズム・

ダダイズム・シュルレアリスム運動の中心人物。

生前、ノーベル文学賞の候補に挙がっていたものの、受賞を逸している。

1958年には谷崎潤一郎とともにノーベル文学賞の候補者

(候補41人中)になった[7]。その後、1960年から1968年までの間も毎年

候補になったことが明らかになっている

「翻訳作品や評価のための資料が少ない」との低い評価を下され、1963

年には「ドナルド・キーン教授からの意見に従い、西脇をこれ以上推薦

しないことにした」とあり、選考側が日本人文学者について参考としていた

キーンが西脇を評価していなかったことが明らかになっている。